

学校を  
創る

学校教育目標「自己肯定感をもった生徒の育成」の実現のための組織的な取組



成田市立玉造中学校長 さむかわ てるじ 寒川 晃士

## 1 はじめに

学校教育目標は「徳・知・体の調和のとれた自己肯定感をもった生徒の育成」とした。目指す生徒像には、①「『玉造中でよかった』と心から言える生徒」②「当たり前のこと（当たり前五項目）が当たり前にできる生徒」とした。生徒の自己肯定感や自己存在感が育てば、きっと「玉造中でよかった」と言えると考え設定した。

着任後、生徒をまだ目にする前に、学校教育目標を示すことに私は抵抗を感じた。経営ビジョンを準備して着任したものの、実態を捉えて初めて方策を提示できるものと考えた。

そこで、職員には4月中に示すことを約束し、その間、生徒、職員、保護者、地域等の実態把握に努めた。

また、前任の校長と連携をとり、学校教育目標の変更を決めた。

そして、「当たり前のことが当たり前にできる生徒」については、「当たり前五項目」を生徒総会で再確認した。その経緯については、後で触れたいと思う。

## 2 各種調査の実態から

本校の生徒で、「自分にはよいところがあると思う（全国学力・学習状況調査）」の回答は、国や県と比較して約7%低かった。また、「難しいことでも失敗を恐れないうで挑戦していますか」、「友達の前で自分の考えや意見を発表することは得意ですか」の問いに対しても約5～8%低く、自

信のなさが伺えた。

成田市独自の学力調査を分析したところ「自分にはよいところがあると思う」という問いに、「思う・まあまあ思う」と回答した生徒の教科に関する設問の正答率は大変高かった。このことから自己肯定感の高さと学力とは相関関係があると考え、自己肯定感の育成が学力向上にも直結すると考えたのである。

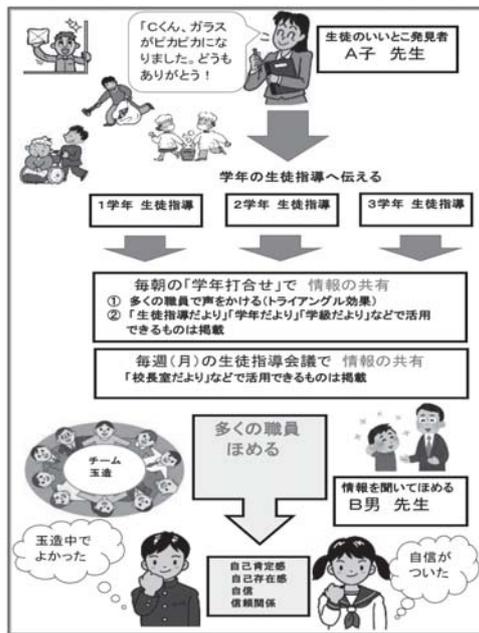
## 3 具体的な取組

自己肯定感をもった生徒の育成の中核に「認め、ほめて伸ばす」とした。生徒のがんばりや地道な努力などを見逃さない観察力、職員が情報を共有し、多くの職員で認め、ほめていく組織力、生徒の活躍の場を意図的に設定する計画力の3つの力を大切にしている。

努力の過程を見逃さず適時称賛していくとともに、職員間でも情報を共有し、多くの職員で声を掛けている。多くの職員が多様な方面から認めていくことが、自己肯定感をもつことにつながり、ひいては「玉造中でよかった」と言える一つのアプローチになると考え取り組んでいる。

### (1) 「いいところ掲示板」の活用

平成28年度の具体的な取組としては、パソコン共有フォルダ内「いいところ掲示板」に生徒のがんばりを発見した職員が入力し、それを見て多くの職員から「〇〇先生がほめていたよ」などと声を掛けていく。この好循環を本校ではトライアングル効果



と名付け、実践しているところである。「いいところ掲示板」を確認することで、自分の担当する学級、学年以外の生徒のがんばりや、土日の部活動での活躍などを職員間で共有することをねらいとして行っている。平成28年度全国学力・学習状況調査で「先生はあなたのよいところを認めてくれていると思いますか」の問いに、生徒の肯定的評価は93%であり、平成29年度も更に先生はよく観てくれていると実感できるよう組織的に進めていく予定である。

## (2)各種たよりの掲載

本校では、学年だよりを毎週金曜日に発行し、各学年の生徒の活躍やがんばりを掲載している。また、生徒指導だよりも毎週発行し、学年を越えた善行を掲載している。

学校アンケートの保護者評価で「学校は、子どもの様子を学年・学級通信や保護者会等で伝えている」の肯定的評価が99%と他より高い数値である。各種たよりを媒介として「認め、ほめて伸ばす」方針を家庭に継続的に周知していきたいと考える。

## (3)「当たり前」の具体化

数年前より「当たりの前」のことが「当たり前」にできる」と掲げているが、何に対して「当たり前」なのかぼやけていた。そこで、生

徒総会の場で協議を重ね、生徒自らの手で「当たり前五項目」を決めた。

- ①あいさつ・返事（生活委員会）
- ②学習（学習委員会）
- ③無言清掃（美化委員会）
- ④歌声活動（歌声委員会）
- ⑤団結力（評議委員会）

（ ）は各項目の担当委員会である。それを生徒会が統括している。担当委員会は、各項目の活動を充実させるためにコンクールやキャンペーン等、様々な企画を考え、運営している。何より、生徒が決めたことなので、自治的な活動が機能しやすい。学期ごとに、各委員会主導による各項目の表彰を行っている。表彰が目標にならないよう、人のため、自分のために取り組めるよう導いている。

当たり前五項目の実践を通して、職員は、生徒のがんばり、活躍を認める機会が得られている。また、生徒は自己肯定感をもてる機会となり、相乗効果をもたらせている。

## (4)職員に向けて「校長室だより」を発行

4月に校長が示す経営方針だけでは、十分な周知と浸透は難しい。そこで校長室だよりを通して、継続的、補助的に発信することを目的として発行している。職員に方針を示したからには、私も実践できるようタイトルを「範を示す」とし、授業、部活動、行事等での生徒のがんばりの様子等も掲載している。

## 4 おわりに

叱る場面があれば次にほめるためのチャンスの場合と捉え、生徒の成長と一緒に喜べる職員に支えられて、私も成長していることを実感している。職員あつての管理職と常々感謝している。職員にも「玉造中でよかった」と感じてもらうことを願って止まない。

学校を  
支える

## 笑顔あふれる学校に向けて

～職場の協働を目指して～



県立袖ヶ浦特別支援学校教頭

とみなが  
富永  
ひろゆき  
裕之

### 1 はじめに

本校は千葉市緑区にある、肢体不自由教育と病弱教育を行う特別支援学校で、今年度創立50周年を迎える。小学部、中学部、高等部、院内部があり、通学困難な児童生徒のため寄宿舎も設置している。児童生徒は169名、教職員199名（平成29年4月1日現在）である。隣接する千葉県千葉リハビリテーションセンターや千葉県こども病院に入所・入院する児童生徒の教育も担当し、1年間で転入・転出が200名程度ある。また、教職員の職種は、細かく分類すると27種にもなる。

在籍する児童生徒の障害や病気は年々多様化し、重度化・重複化している。医療的ケアが必要な児童生徒も増加しており、教員と学校看護師（1日9名）が協働して安心・安全な医療的ケアの実施に努めている。

### 2 気持ちを伝える

本校に教頭として赴任して、一年が経った。私は、朝と帰りに、正門の担当、出入りの担当、駐車場の担当、車いすの担当と連携を取りながら、安全を確保している。本校に赴任するまでは、中学校に勤務していたので、生徒に対して、ただただ元気なあいさつと言っていた。現在は、大きな声であいさつをしてくれる子はもちろん、アイコンタクトであいさつしてくれる子、眉毛を動かしてあいさつしてくれる子、指先を使ってあいさつしてくれる子と様々である。それらは、単なるマナーではなく、お

互いの「気持ち」を確かめ合う場になっている。今日の体調や気合を小さな言葉やアクションにのせて表現しているのである。私の今朝のあいさつは、周りにどんな気持ちを伝えられたのだろうかと考えながら車を誘導している。保護者の方々や児童生徒に少しでも笑顔と元気が出るように心掛けている。

### 3 職場の環境とその課題

障害や病気を有する児童生徒一人一人の日々の生活環境は様々である。私たち教職員は、その実情を把握し、子どもたちの命を預かり、安心して学習できる環境を整えながら、教科等の学習はもとより、障害や病気の理解、心理的な安定、人間関係の形成などについての指導をしている。このように、本校職員の仕事は多岐にわたっており、職員の日々の緊張感も極めて高い。

昨年度から、私は衛生委員会の一員になり、職場における労働衛生や職員の心身の健康管理について意見を聞き、改善するための話合いの場に参加した。その中で、児童生徒一人一人の実態に合わせた対応が求められることや、仕事量が多いとか、職員間での人間関係が築きにくいなど、多くの課題が出された。

### 4 衛生委員会の昨年度の計画

約200名がいる職場で、日ごろ部単位や課単位で職務を遂行しているので、異なる部・課同士では、交流が少ないところもあ

る。そのことについて、衛生管理者の先生や養護教諭が中心になり、積極的に話合いがなされた。そして、職員の交流が盛んになれば、諸課題を円滑に解決できると考え、次の3つの案が検討された。

#### (1)ワーキンググループ活動

子どもたちの将来の夢や良き姿を頭に描きながら、こんな授業がしたい、こんな教材や道具が欲しいなどといった、アイデアや発想を出し合い、今後の授業や学校生活に生かしていく。

#### (2)ワールドカフェ

会議での討論のやり方で、一つのテーマに対して参加者が最大限意見を交わし、そのテーマに関する新たな発想やものの見方を発見していく。

#### (3)職員交流

スポーツやレクリエーションを通して、互いに汗を流したり、一つのことに打ち込んだりして、心と体の健康づくりにつなげていく。

## 5 具体的な取組

教職員がすがすがしい気持ちになれるように職員交流を年2回、9月と12月に実施した。時間は約1時間で職員からリサーチして、得意分野の講師を見つけ、あらかじめ8つのサークルを提示し選択してもらった。

(1)ボードゲーム…オセロやクワートなど体を休めて頭を使い交流する。

(2)コーヒータイム…いろいろな豆や入れ方で、味を楽しみながら語らう。

(3)アロマコーナー…アロマの香りをかぎながら、気持ちをリフレッシュする。

(4)韓流音楽…CDやDVDを持ち寄ってKポップを聴いたり、鑑賞したりする。

(5)ネット型スポーツ…バドミントンやソフトバレーボールを行い、激しく動く。

(6)ヨガ…呼吸を意識しながら体をゆっくり

伸ばし、穏やかな気持ちにする。

(7)ニューゲーム…ボールとブロックを使ったボッチャのようなゲームをする。

(8)アイスブレイク…じゃんけんなどのゲームを行い、打ち解けていく。

今回職員交流を行い、講師及び参加者延べ約150名が活動した。学部や課、職種を越えて自分の希望したサークルで、汗を流したりくつろいだ空間で語らったりした。どのサークルも時間が経つにつれ自然と笑顔があふれてきた。一時間という時間はあっという間に経ち、その後も続けているサークルもあった。新しい交流ができたとか、またやりたいとかいう声が多かった。

心身の健康管理は、個々に行うところもあるが、今回のように人と人との交流が大切だということを改めて感じた。大きな職場、日々忙しい職場であればあるほど、このような機会が必要だと思う。

## 6 おわりに

放課後に教室を回っていると、遅くまで残って、教材教具を作ったり、教室環境を整えたりする職員もいて頭が下がる。励ましの言葉を掛けたり、行き詰まっているようなときは気分転換できるような話をしたりする。すると、逆に職員から励ましの言葉をもらう。お互いを勇気付ける言葉、喜びを分かち合う言葉、聞いていてうれしくなるような言葉を言い合える職場は最高だと思う。こうした教職員に支えられて勤務することができていることに感謝する。

児童生徒、保護者、教職員、そしてその家族といる中、日々何かが起こる。校長、副校長を助け、管理職が力を合わせて、学校がより良い方向に向かうように努力している。

学校を動かす

## 学校組織の一翼を担うということ

前流山市立南流山小学校教諭  
野田市立みずき小学校教諭

いしがき さちこ  
石垣 幸子



### 1 はじめに

私は前任校で、教務主任という立場で学校行事、教育課程、学校組織等を考える機会を得た。初めての経験で、教務主任という立場を自分で理解し、多忙な中、先を見通して行事を見直し、提案していくことは、容易なことではなかった。「組織として学校を動かす。」ことに常に頭を悩ませてきたが、自分自身もまた、校長先生をはじめ職員や保護者や地域の方々という「組織」に支えられて一年を終えることができたと思っている。

### 2 新任教務主任研修会を受講して

研修会の中で、「組織マネジメントとリーダーシップ」の講話が特に印象的であった。リーダーシップとは、一人では実現できない何かを他者に働き掛け、協力を仰ぎその実現を目指す力をいう。リーダーとしての職責は、危機管理、法令順守、説明責任であると学んだ。学校は組織で動かすものであり、良い組織とは構成している人たちが自由に意見を言えるということが重要である。また、誰がリーダーになっても強い組織であることが理想である。組織は信頼関係で成り立っている。互いの違いを受け入れ、認め、生かしていくこと、つまり多様性の受容であると考えている。

### 3 若手教員の良さが発揮できるように

今、学校では、いかに若年層が組織の中で活躍できるかが鍵を握っていると思う。組織の一員として若年層が更に飛躍するために、教務主任としてできることを考えてきた。

一つ目は、若手教員が見通しを持てるように努めることである。そこで、共通理解

事項は、早めに提案し、明文化して残るように工夫した。明文化することで提案の意図が整理され、大勢に伝わりやすくなった。

二つ目は、若手教員に対して、期待されている姿を例示して助言することである。教務主任は、校長が指示した学校経営方針が、教育課程に反映されるように行事等で具現化する立場にある。そこで、若手教員の提案等に対して、「今年度の学校経営方針に沿っているか。」「前年度の反省点が生かされているか。」「計画に具体性と一貫性があるか。」という点で、提案内容を読み、提案意図に耳を傾けた。説明をしてもらうことで、矛盾や補足すべき点を整理し、必要があれば再提案を促してきた。

最後に、若年層がこれから学校組織の中心となる大切な存在であるからこそ「共に学び続ける。」「若手を育てる。」という姿勢を相手に示すことが重要であると実感した。こちらから積極的に声を掛け、若手教員と対話しやすい雰囲気を作ることで相手の現状を把握し、戸惑っていることに的確に助言できるよう、自分も研鑽を積む姿勢が重要である。また、若手教員を孤立させないように職員間の親睦を深めることも教務としての大切な務めであると感じた。

### 4 おわりに

教務主任の仕事の大半は、学校組織が円滑に動くように、人と人をつなぐことではないだろうか。個々が生かされ、上手くつながっていれば、「強い組織」になれると思う。教務主任という貴重な経験を生かして、これからも学校の強い組織作りの一翼を担っていきたいと思う。



## 研究主任として学校運営に携わる



船橋市立宮本中学校教諭 **もり 森** **たかとし 貴俊**

### 1 はじめに

私が抱いていた研究主任のイメージは、職員の全体研修を企画・運営する立場にある人というだけのものであった。しかし、実際には授業改革や若年層研修など多岐にわたり、研究主任という立場から変えられることがたくさんあることが分かった。ここでは、今回研究主任として私が取り組んだことについて紹介させていただく。

### 2 具体的な取組と成果

#### (1)研究主題の見直し

見直すきっかけになったことは二つある。一つは、学校教育目標と目指す生徒像が変わったことである。二つ目は、本校が保健体育科の研究指定を受けており、学校全体でその研究をサポートするためである。主題変更にあたって、「主体的」「関わり合い」をキーワードとし、アクティブ・ラーニングの視点にも考慮した。

研究主題が変われば、教科の研究主題も見直す必要があり、教科部会などで主題の検討を依頼した。

#### (2)全体研修の企画・運営

本校の特色として、PTA活動が盛んで、地域の方も様々な形で学校に協力してくれている。一方で、地域のことをよく知らない教員が多かった。そこで、職員に地域(学区)を知ってもらうための研修を企画した。近隣小学校の元校長先生に講師をお願いし、フィールドワークを行いながら、学区の歴史を学習した。私自身、社会科の教諭でありながら初めて知ったことが多く、大変勉強になった。

一学年ではこの研修を総合的な学習の時

間で生かした。総合的な学習の時間の内容を充実させることが本校の課題でもあったので、今回の研修を機に、地域学習を定着させていくことを予定している。また、特別支援学級(知的・情緒)も設置されているので、インクルーシブ教育についても研修を企画した。

#### (3)環境整備

先生方には様々な研修の機会が与えられている。しかし、いつ、どこで、どのような研修が行われているのか、なかなか周知されていない。そこで、先生方が頻繁に行く印刷室に色々なお知らせを掲示するスペースをつくった。

### 3 今後の課題

研究主題は変えたものの、その主題に対する取組については教科部会に任せっきりになってしまい、検討することができなかった。また、「学び合い」を意識した授業の実践報告(簡易形式)を求めていたが、その報告書の提出を徹底できなかった。本校の先生方はとても協力的であるので、しっかりした校内体制を構築することが必要であると感じた。

### 4 おわりに

先生方の協力もあり、研究主任としていくつかの取組を行うことができた。今年度は教務主任として、学校を動かす立場となった。研究主任として取り組んできたことを生かしながら、昨年度課題として残ったものについても、積極的に取り組んでいきたい。



## “いま”に目を向け、“未来”を展望する社会科授業づくり ～新聞記事の活用～



八街市立笹引小学校教諭 さとう かずま 佐藤 一馬

### 1 はじめに

社会科は、他教科と違い、その時代その時代によって学習内容が大きく変化する。だからこそ、“いま”に目を向けさせ、児童に自分たちが生きる“未来”を展望させる機会をもたせていくことが非常に重要である。

私が、社会科授業の教材づくりにおいて大切にしていることは、以下のとおりである。

社会で実際に起きていることが教材から垣間見えるかどうか

社会科は、知識だけを教える教科ではない。社会に実際に生きる人々が、何を考え、どんな問題を抱え、よりよく生きようとしているのか、“生の声”を児童に届かせていくことが大切であると考えます。

### 2 授業実践の概要

“生の声”を取り上げる格好の手段として、新聞の活用がある。本実践は、小学校4年生の社会科「わたしたちの県」の単元の中のまとめ・広げるの段階での授業である。児童は、これまで千葉県 の地形・土地利用・主な産業について学習してきた。

本時では、平成29年2月4日の新聞記事（千葉日報）を授業の導入に提示した。一面の見出しには、以下のように書かれており、見出しの最後の部分に何が入っているのかを考えさせた。

五輪向け 日本遺産に申請「房総 」

前提知識として、

- ①本遺産の意味と、県内ではすでに江戸を感じる北総四市の歴史的な街並みが指定されていること
- ②2020年東京オリンピックの一部の会場が千葉県に決まったことを児童に提示した。

世界の人々にぜひ伝えたい千葉県ならではの「すごいところ」は何かを考えさせた。児童はこれまでの学習を生かして、それぞれ予想した。



実際の新聞記事を児童に提示

以下の項目は、児童が予想として考えた主な内容である。

<落花生>

日本有数の産地。千葉半立という品種もあるから。味も誇れる。

<房州うちわ>

日本的で古くからの伝統もある。外国の方々が東京五輪観戦で使って、涼んでほしい。

<南房総の花弁栽培>

路地で育てた南房総のきれいな花を外国の方々にもつんでもらえるといい。

<魚>

千葉県は三方を海に囲まれているから。

銚子漁港の水揚げ量は、全国有数だから。

<野菜>

千葉県は、いろいろな野菜を作っていて、新鮮なまま東京に届けられるから。

など。

友達に自分が考えた予想とその根拠を伝え合った後、新聞記事のコピーを配付し、読み合っていくこととした。ヒントとなりそうなキーワードを見つけること、記事に書かれている地名にアンダーラインを引くという指示を出した。児童は、記事に出てくる地名がどの場所にあるか、そこではどんな産業が盛んなのかを地図を活用して考えた。その地名は、「銚子」「大原」「木更津」「富津」「館山」「南房総」「勝浦」「九十九里」である。



地図を活用して見出しの言葉を予想

多くの児童は、これらは全て海沿いの地名であることに気付き、見出しの言葉が水産業と大きく関係しているのではと予想することができた。児童が見出したキーワードは、以下のものがある。

- |         |        |
|---------|--------|
| ・なめろう   | ・さんが焼き |
| ・太巻きずし  | ・しょうゆ  |
| ・大原はだか祭 | ・潮干狩り  |

「なめろう」や「さんが焼き」について

は、詳しく知らない児童がいたため、教師が補足説明を加えた。「魚貝」「料理」と答えた児童には、「大原はだか祭」や「しょうゆ」との関係を探ることとした。児童は、「しょうゆ」でおさしみを食べることや「大原はだか祭」は、大漁を祈願する祭であることに気付くことができた。

話し合いを進めていくうちに、児童は最終的に実際の記事に書かれている「海の幸」を見出す児童もいれば、「古くから息づく海の食文化」「海に対する人々の願い」に気付く児童もいた。以下は、授業後の児童の感想である。

- ・千葉県から「海の幸」が日本遺産として登録されるといい。自分がまだ知らない伝統や料理をいろいろ調べてみたい。
- ・新聞を使った授業はこんなに楽しいとは思わなかった。教科書に載っていないことを知れてよかった。
- ・千葉県の人々は、ずっと海と生きてきたことがわかった。僕たちも海を大切にできるといい。

“未来”の千葉県に生きる児童一人一人が房総ならではの「海の幸」に対して、大事にしていこうとする姿を見ることができた。

### 3 おわりに

今回の授業では、千葉県の学習と関連させ、新聞記事をトピック的に扱うこととした。

社会科は、社会とつながることができる教科である。したがって、社会科の学習は、教科書や資料集とノートだけで完結するものではない。授業者が常に社会の動向を注視しつつ、アンテナを高くして、日々の教材に使えるものを開発し続けなければならない。私は、そこにこそ社会科としての面白さがあるのではと考える。

子どもを知る

## 教師の役割

～初任で学んだこと～



野田市立中央小学校教諭 かわぐち こうじ  
川口 耕司

昨年、私は小学校の先生になる夢を叶えました。4年生の担任となり、新学期を迎えてからは怒涛の毎日で、授業や学級経営で悩みながらも、子どもたちと楽しい時間を共に過ごしました。私がつまずいたときは先輩の先生から助言をいただき、失敗をしたときは何がいけなかったのか一緒に考えてもらいました。初任者研修では、同期の仲間と切磋琢磨し合いながら、年間を通して授業実践、学級経営について学び、自分の引き出しを増やすきっかけになりました。学級では、「失敗は成長のもと。」を合い言葉にし、肯定し合える雰囲気を作り出したことで、自分の考えを臆さずにみんなに伝えられるようになり、手を挙げて発表する児童が増えました。私が何度も繰り返し指導したことを理解し、行動している姿を見たときは、子どもの成長を感じ、嬉しいという言葉だけでは表せない感動がありました。導入を工夫し、準備をした算数の授業が終わった後「先生、今日の授業面白かった。」と言われ、「もっと頑張らなければ。」と使命感に駆られました。この1年で、教師は子どもの人生を左右してしまう仕事だと理解し、より責任の重さを感じるようになりました。思い返せば私も小学生の頃、担任の先生に将来花咲く種を蒔いてもらった一人です。初任で学んだことを忘れず、昨年度の反省を無駄にしないよう、日々子どもと向き合い、今度は子どもたちの夢を叶える後押しができるように頑張ります。

子どもを知る

## 子どもたちとの関わりの中で



勝浦市立勝浦中学校教諭 たまたに しゅんぺい  
玉谷 峻平

教師は、子どもたちにいろいろなことを「教える」仕事。私はずっとそう思っていた。実際に、授業や生活指導、部活動など、子どもたちに教える場面はたくさんあり、「教える」仕事というのは間違っていないと思う。しかし、私が現場で子どもたちと関わる中で気付かされたことがある。

昨年度、初任者として一年間様々な場面で子どもたちと関わってきた。授業の中での子どもたちの「できた」「わかった」という顔。体育祭でお互いが本気でぶつかり合い戦う姿。合唱コンクールで全員が心をつなげて曲を作り上げる団結力。卒業式での「先生ありがとう」の言葉。子どもたちが日々成長していく姿を見ていく中で、私自身が子どもから学ぶことがたくさんあった。そうした姿を見る中で、「力量ある指導者を目指し、より頑張らなければ」という気持ちが強くなっていった。

この一年間で私が感じたことは、教師は子どもたちを教え導くことを通して、「共に成長していける」ということである。教師の姿を見て子どもたちが成長し、その子どもたちの姿を見て教師も成長していく。その相互作用が良い学校を作っていくと感じた。

今年度から初の学級担任。子どもたちとより密接に関わる中で、お互いが更に成長できるよう精進していきたいと思う。